

高等学校の成績および入試種別と入学後の学習成果との関連性

—柔道整復師養成の専門学校入学者を対象とした調査—

日本体育大学医療専門学校

吉田 裕輝

他 1 名

要旨

公益社団法人全国柔道整復学校協会が 2022 年に行ったアンケート調査結果から、募集定員に満たない柔道整復師を養成する学校が多数存在することが窺える。また、国家試験の合格率は近年減少傾向にあり、2023 年に実施された第 31 回国家試験は過去最低の 49.6%であったことから、養成校入学者の学力低下が懸念される。入学者選抜が適切であったか、また、入学後の教育が教育理念や目標を達成するのに適切であったかは、国家資格を取得して医療人としての仕事を評価しなければ判断できない。しかし、入学してきた学生が期待通り柔道整復師になるための学習に取り組めるか否かを調査することは教育方法改善の参考となると考えた。そこで、本研究では、高校の評定平均値、入学試験の成績、入学後の試験との関係性を分析した。さらに、性別、学歴や入学試験区分など様々な角度から入学前後の成績を分析し、考察した。

2014 年から 2023 年の 10 年間における A 専門学校の入学者 377 名を対象として、高校の評定平均値、入学試験の成績、および中間試験の平均点を調査し分析した。

その結果、相関分析では、中間試験基礎分野、中間試験専門基礎・専門分野間で強い相関が認められた。また、評定平均値が高い群ほど、入学試験成績、中間試験の結果は良いことが明らかとなった。そして、大卒群は高卒群より中間試験結果が有意に高いことも明らかとなった。さらに入学試験区分別の分析では AO、一般、推薦群の間で中間試験結果に有意な差がないこと、評定平均値や入学試験成績、中間試験結果は、入学試験受験時期による差はないことが明らかとなった。

1. 緒言

2023 年現在、柔道整復師を養成する専門学校は全国に 88 校存在しており、公益社団法人全国柔道整復学校協会（2022）が行ったアンケート調査によって、56 校の地域別定員充足率が公表されている。その内訳は、午前部では北海道・東北 79.7%、関東甲信越 74.1%、東海・北陸・近畿 87.2%、中国・四国・九州 90.2%、午後部では関東甲信越 67.8%、東海・北陸・近畿 68.6%、中国・四国・九州 79.5%、夜間部では関東甲信越 70.0%、東海・北陸・近畿 39.4%、中国・四国・九州 46.7%、である。これらの数値からすべての地位の学校の充足率は 100%に達しておらず、受験倍率が 1 未満の学校が全国的に多数存在していることが推察される。少子化の影響や学校数の増加により、基礎学力が低い受験生であっても合格しやすい状況は今後も継続すると考えられる。

柔道整復師国家試験（以下、国家試験）の合格率を見ると、第 1～22 回（1993～2014 年）までは比較的高水準（%）で推移しているものの、全体の合格率は緩やかに低下しつつある（松本ほ

か、2015)。特に第23回(2015年)以降は低下率が著しく、2023年3月に実施された第31回国家試験では、新卒受験者3,201名中合格者2,092名(合格率65.4%)、既卒受験者1,320名中合格者152名(合格率11.5%)であり、受験者総計では4,521名中2,244名合格(合格率49.6%)と過去最低の合格率であった。

このような背景から、入学者の学力低下が国家試験合格率へ大きな影響を与えていると考えられる。先行研究によって1年次の成績は卒業時の成績と正の相関があることが知られている(浜田, 2014; 赤木ほか, 2010; 坪田ほか, 2011)。柔道整復師養成学科の大学生を対象とした服部ほか(2018)の調査においても、1.2年次と4年次の成績には強い相関があることが示されている。そのため、最終学年になってから国家試験に向けた学習を行うことも大切であるが、初年度の成績を上昇させることが重要であると言える。初年度の成績を上昇させるには、①「入学試験で基礎学力が高い学生を選抜する。」ことが重要であるが、全国的に定員充足率が低下している現状においては困難な場合が多い。そのために、②「基礎学力の低い学生に対して、入学後早期に学習のサポートをする」ことが重要であり、入学後できるだけ早く学生の学力状況を把握する必要がある。

柔道整復師養成施設として入学者選抜が適切であったか、また、入学後の教育が教育理念や目標を達成するのに適切であったかは、国家資格を取得して医療人としての仕事を評価しなければ判断できない。しかし、入学してきた学生が期待通り柔道整復師になるための学習に取り組める基礎学力があるか否かを、高校の評定平均値や入学試験の成績、入学後の試験との関係性から分析することは、教育方法改善の参考になると考える。また、学生募集において、より学力の高い学生を確保するための入学試験の時期、選抜方法などを検討する上で、今回の調査結果を分析材料とすることもできるが、柔道整復師養成の専門学校入学者を対象に入学前後の学力の関連性を分析した報告はまだない。そこで、本研究では、高校の評定平均値、入学試験の成績、学内で実施される最初の試験である中間試験結果との関連性を分析した。さらに、性別、学歴や入学試験区分など様々な角度から入学前後の成績を分析し、考察した。

2. 方法

2-1. 倫理的配慮

各個人の氏名、年齢、性別、高校の評定平均値、学歴、入学試験の成績などが記録された入学試験データベースの情報はすべて、仮名加工情報とすることで個人情報を保護した。また、個々の中間試験の各科目の点数とその平均点も仮名加工情報とし、入学試験データベースの個人コード番号と紐づけて処理した。そして、これら仮名加工情報は施錠可能な媒体で保管した。本研究は日本体育大学医療専門学校における研究倫理委員会の承認(承認番号:第023-01号)を得て、データの使用が許可されたため分析を実施した。研究対象者全員にデータ使用の同意を得ることができないため、オプトアウトとしてA専門学校ホームページに研究内容を公開し、研究対象者が拒否できる機会を設けた。また、日本学術振興会が実施している研究倫理eラーニングコースを受講、理解、遵守し実施した。

2-2. 収集データ

2014年から2023年の10年間におけるA専門学校の柔道整復師養成課程への入学者383名のう

ち、入学直後に家庭の事情や病気などにより退学した6名を除き、377名を分析対象とした。対象者の高校の評定平均値、入学試験の成績、および1年生の6月上旬に実施される中間試験の平均点を調査し分析に用いた。今回の調査では早期に学生の学力を把握することを目的としたため、学内で最も早期に実施される中間試験の点数を用いた。

2-2-1 高校の評定平均値

高校の評定平均値は高校在学中に修得した授業全ての科目の平均とした。各科目の評定は1から5までの5段階評価である。高校卒業後の経過年月が長く、出身校から調査書を発行できない者と高等学校卒業程度認定試験（旧大学入学資格検定）を経て入学してきた者18名は評定を取得できないため、評定平均値を用いた比較のみ分析対象外とした。

2-2-2 入学試験の成績

A 専門学校で実施されている入学試験形態はAO入学試験、一般入学試験、推薦入学試験（以下、AO入試、一般入試、推薦入試）の3種類ある。入学試験の成績は出願区分により実施される試験内容が異なるため、受験した項目（各項目100点満点）全ての平均値を各個人の成績とした。AO入試受験者は個人面接と小論文の成績の平均として算出し、一般入試受験者では個人面接と学科試験（国語）の平均点として算出し、推薦入試では個人面接の成績とした。

2-2-3 中間試験の平均点

柔道整復師養成校の学習カリキュラムは基礎分野、専門基礎分野および専門分野の3つに大別されている。基礎分野の教育内容は「科学的思考の基盤、人間と生活」、専門基礎分野の教育内容は「人体の構造と機能、疾病と傷害、柔道整復術の適応、保健医療福祉と柔道整復の理念、社会保障制度」、専門分野の教育内容は「基礎柔道整復学、臨床柔道整復学、柔道整復実技、臨床実習」（骨折・脱臼・軟部組織損傷総論および各論とそれらの実技）となっている。このうち、国家試験の出題対象となっているのは専門基礎分野と専門分野である。そこで、中間試験の平均点は、実施された試験全科目の平均点（以下、中間全科目）、国家試験の科目ではない基礎分野の科目のみの平均点（以下、中間基礎分野）および国家試験出題科目である専門基礎分野・専門分野の科目の平均点（以下、中間専門基礎・専門分野）に分けてデータを収集した。各科目は全て100点満点で実施されている。なお実技系科目である柔道や整復実技も筆記試験が実施されているため平均値の算出に用いた。

2-3. 分析項目

2-3-1 相関分析

評定平均値、入学試験成績および中間全科目、中間基礎分野、中間専門基礎・専門分野の結果に相関関係があるか否かを分析した。

2-3-2 評定平均値別分析

評定平均値を2以上3未満、3以上4未満、4以上の3群に分けて分析を行った。今回の分析では2未満の者はいなかった。

2-3-3 学歴別分析

最終学歴を大学卒業者（以下，大卒）と高校卒業者（以下，高卒）の2群に分けて分析を行った。高等学校卒業程度認定試験（旧大学入学資格検定）合格者および，大学・短大中退者は高卒群に含めた。

2-3-4 男女別分析

入学試験データベースに記載の性別に従って，男性群と女性群に分けて分析を行った。

2-3-5 入学試験区分別分析

入学試験はAO入試，一般入試，推薦入試の3種類が実施されている。そこでAO群，一般群，推薦群の3群に分けて分析を行った。

2-3-6 入学試験受験時期別分析

入学試験は毎年同一日程で実施されているわけではないが，9月から3月まで断続的に月1回程度実施されており，その都度合格判定発表が行われている。そこで，今回の分析では，9月・10月の試験に合格して入学手続きを行った者を早期群，11月・12月を中期群，1月から3月を晚期群として3群に振り分けて分析を行った。

2-4. 統計分析

Shapiro-Wilk 検定を行った結果，正規性は認められなかったため，相関はすべて Spearman の順位相関係数を用いて分析した。また，3群以上の比較には Kruskal-Wallis の検定を用い，その後 Dunn-Bonferroni の方法により検定した。2群間の比較には Mann-Whitney の U 検定を用いて分析した。箱ひげ図の中央線により中央値を，箱の大きさにより四分位範囲を表し，有意水準を $p < 0.05$ とした。統計学的処理は SPSS（version 26; IBM Corp., Armonk, NY, USA）を使用した。

3. 結果

3-1. 相関分析

特に中間基礎分野と中間専門基礎・専門分野との間に強い正の相関がみられた（図 1C, $r_s = 0.861$ ）。評定平均値と入学試験成績，入学試験成績と中間全科目，評定平均値と中間全科目の間には正の相関が認められた（図 1A,B,D, それぞれ $r_s = 0.427, 0.416, 0.440$ ）。

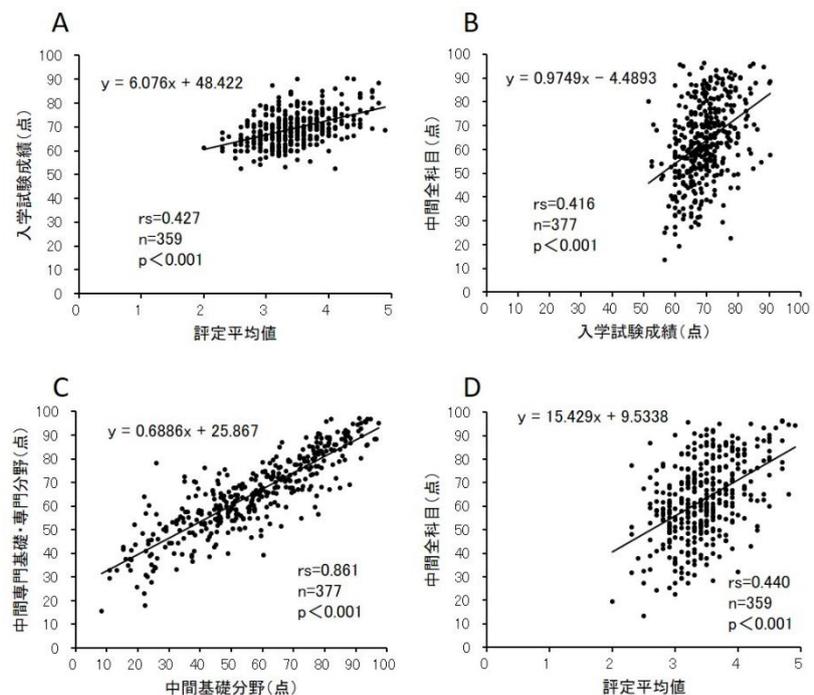


図 1. 評定平均値、入学試験成績および中間試験結果の相関

3-2. 評定平均値別分析

評定平均値別分析結果を図2に示す。入学試験成績は評定平均値2以上3未満群と比べ、3以上4未満群と4以上群で有意に高く、3以上4未満群より4以上群の方が有意に高かった(図2A)。また、中間全科目、中間基礎分野および中間専門基礎・専門分野においても同様に2以上3未満群と比べ、3以上4未満群と4以上群で有意に高く、3以上4未満群より4以上群の方が有意に高かった(図2B-D)。

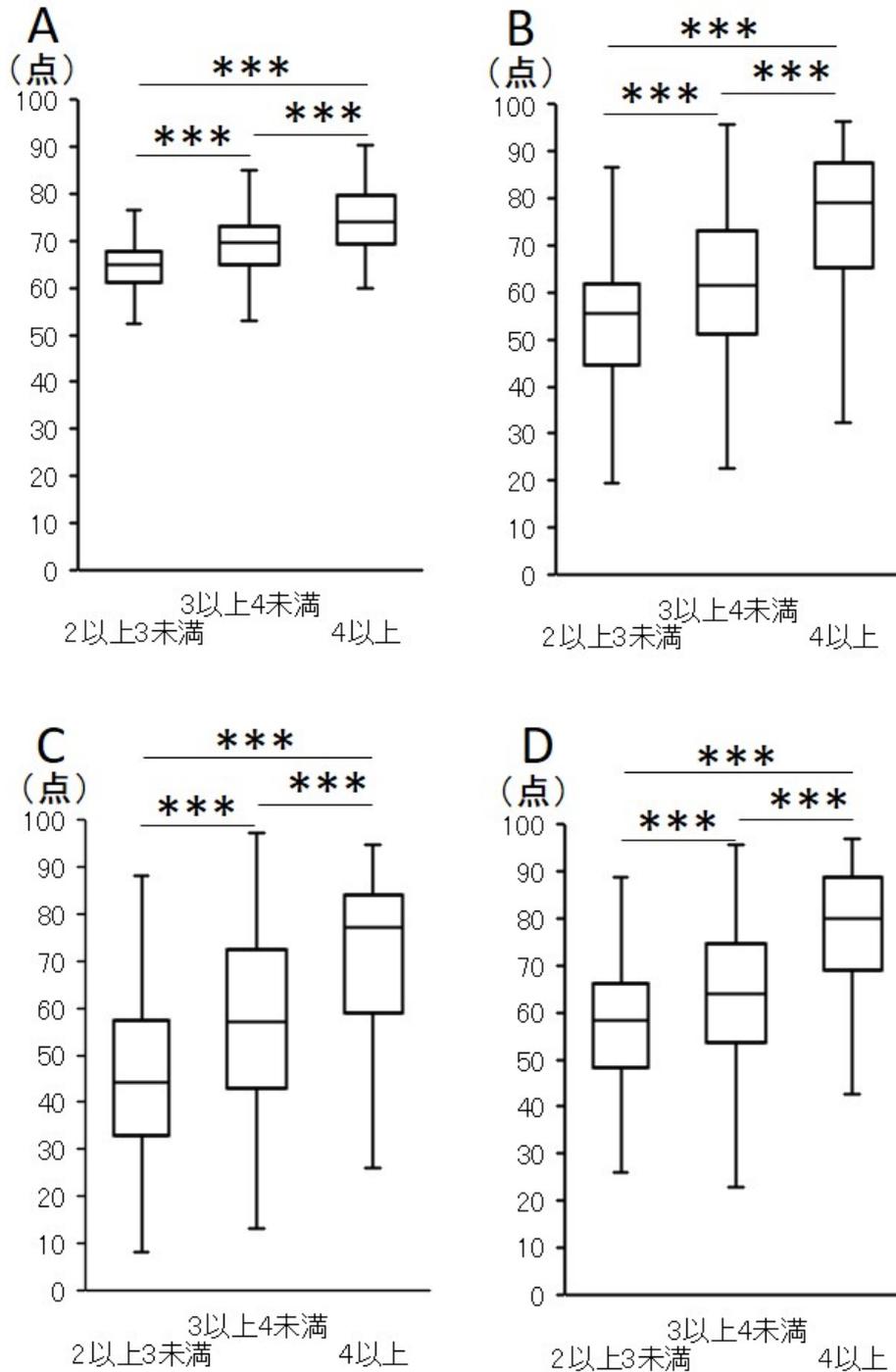


図2. 評定平均値別分析

Aは入学試験成績、Bは中間全科目、Cは中間基礎分野、Dは中間専門基礎・専門分野の結果を表す。箱ひげ図の中央線が中央値を、箱の大きさが四分位範囲を表す。***p < 0.001。2以上3未満群 (n=62), 3以上4未満群 (n=243), 4以上群 (n=54)。

3-3. 学歴別分析

評定平均値および入学試験成績では有意な差は認められなかった (図 3A, B). しかし, 中間全科目, 中間基礎分野および中間専門基礎・専門分野においては, 大卒群は高卒群に比べ有意に高値を示した (図 3C-E).

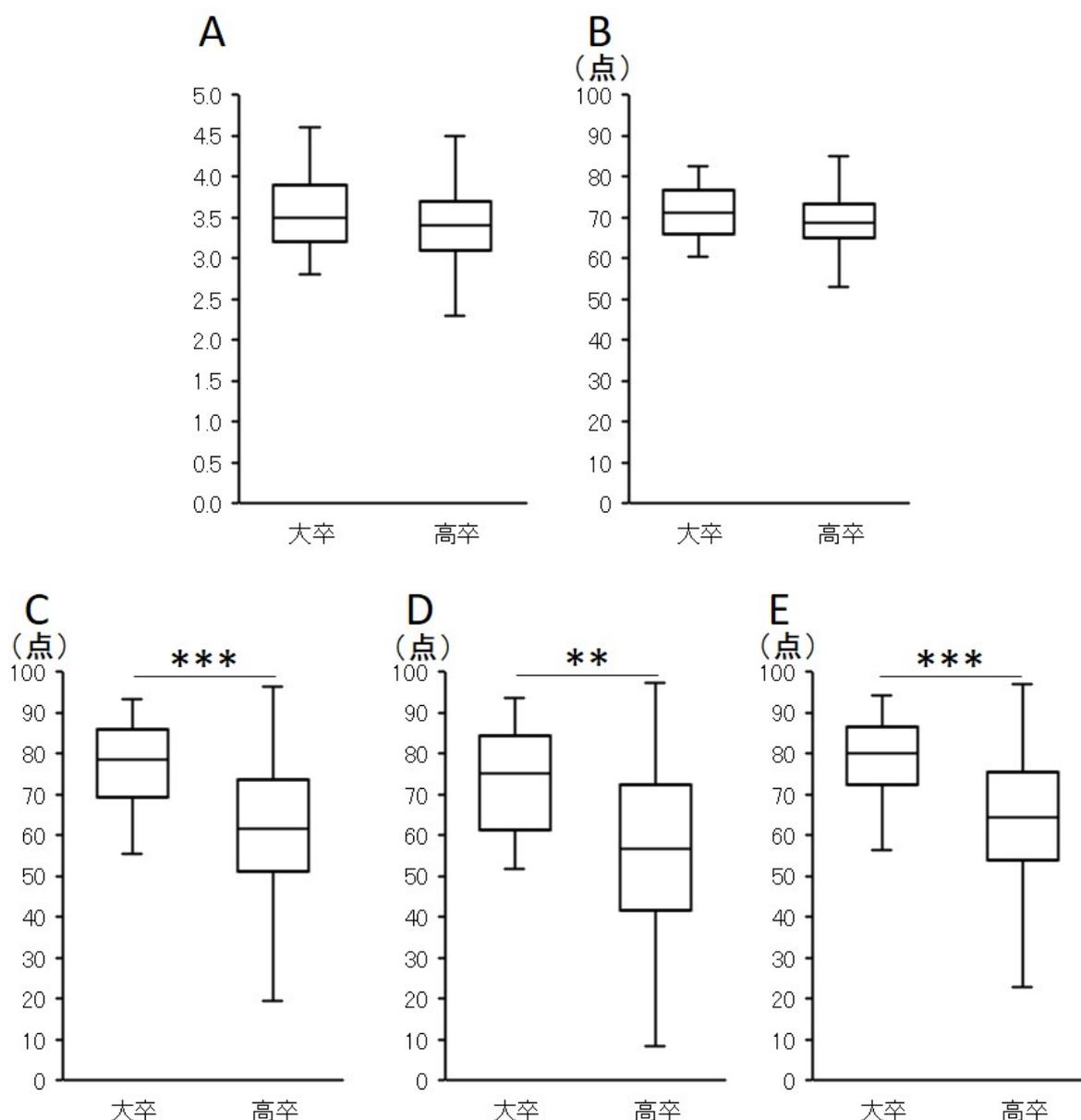


図 3. 学歴別分析

A は評定平均値, B は入学試験成績, C は中間全科目, D は中間基礎分野, E は中間専門基礎・専門分野の結果を表す。箱ひげ図の中央線が中央値を, 箱の大きさが四分位範囲を表す。** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$. 大卒群 (n=21), 高卒群 (n=356). 評定平均値の分析のみ大卒群 (n=15), 高卒群 (n=344).

3-4. 男女別分析

入学直後に退学したものを除く 377 名中, 男性は 248 名, 女性は 129 名でおよそ 2 : 1 の割合であることが明らかとなった。そして, 評定平均値, 入学試験成績, 中間全科目, 中間基礎分野および中間専門基礎・専門分野全ての比較で男性群より女性群の方が有意に高値を示した (図 4A-

E).

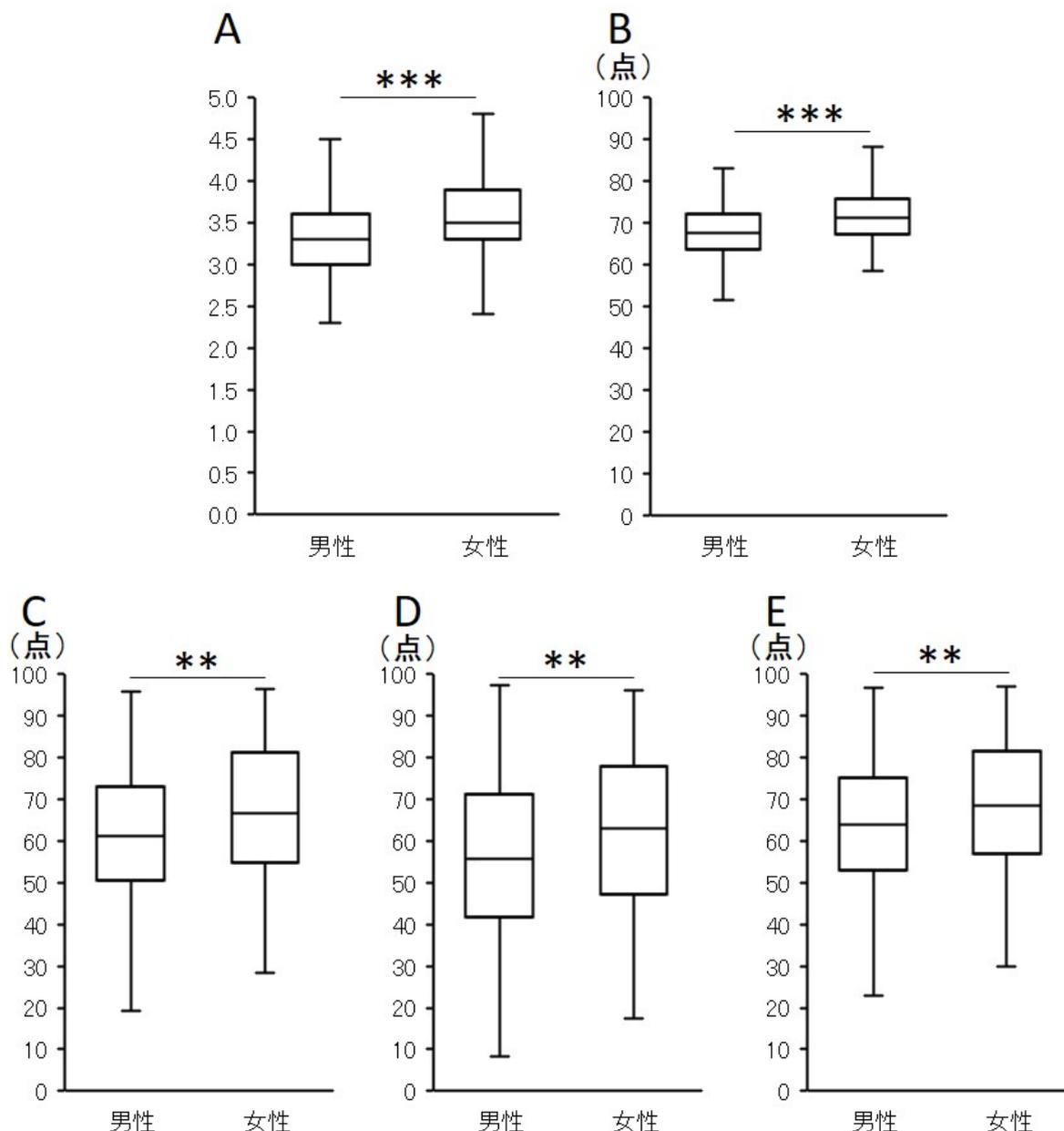


図4. 男女別分析

Aは評定平均値, Bは入学試験成績, Cは中間全科目, Dは中間基礎分野, Eは中間専門基礎・専門分野の結果を表す。箱ひげ図の中央線が中央値を, 箱の大きさが四分位範囲を表す。** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$. 男性群 (n=248), 女性群 (n=129). 評定平均値の分析のみ男性群 (n=236), 女性群 (n=123).

3-5. 入学試験区分別分析

入学試験区分別分析では評定平均値において, 推薦群はAO群および一般群に比べ有意に高値を示した(図5A). また, 入学試験成績も同様に推薦群はAO群および一般群に比べ有意に高値を示した(図5B). しかしながら, 中間全科目, 中間基礎分野および中間専門基礎・専門分野においては有意な差は認められなかった(図5C-E).

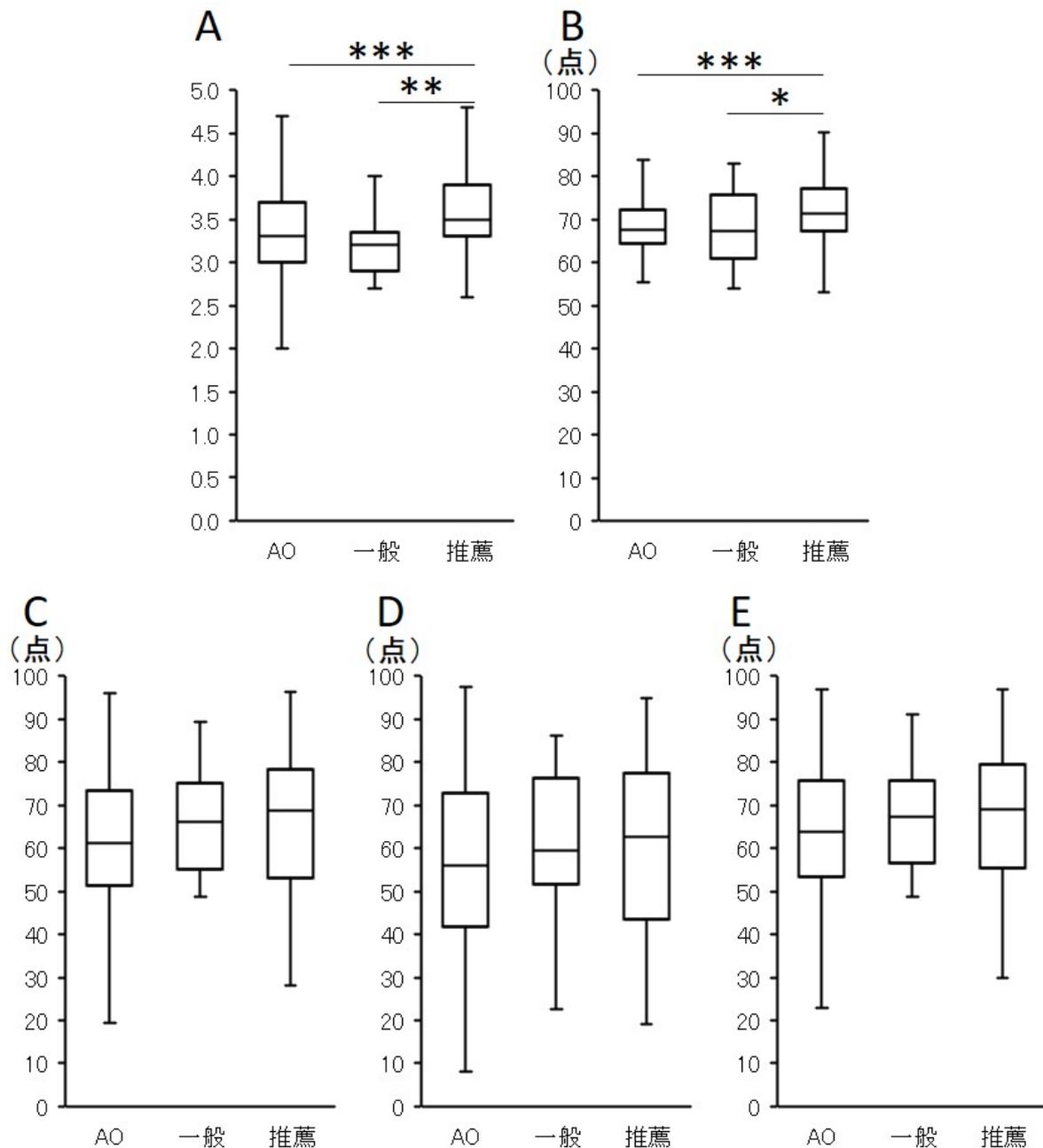


図5. 入試区分別

Aは評定平均値, Bは入学試験成績, Cは中間全科目, Dは中間基礎分野, Eは中間専門基礎・専門分野の結果を表す。箱ひげ図の中央線が中央値を, 箱の大きさが四分位範囲を表す。* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$. AO群 (n=257), 一般群 (n=18), 推薦群 (n=102). 評定平均値の分析のみ AO群 (n=243), 一般群 (n=14), 推薦群 (n=102).

3-6. 入学試験受験時期別分析

今回調べた評定平均値, 入学試験成績, 中間全科目, 中間基礎分野, 中間専門基礎・専門分野全ての項目に関して, 群間で有意な差は認められなかった (図 6A-E).

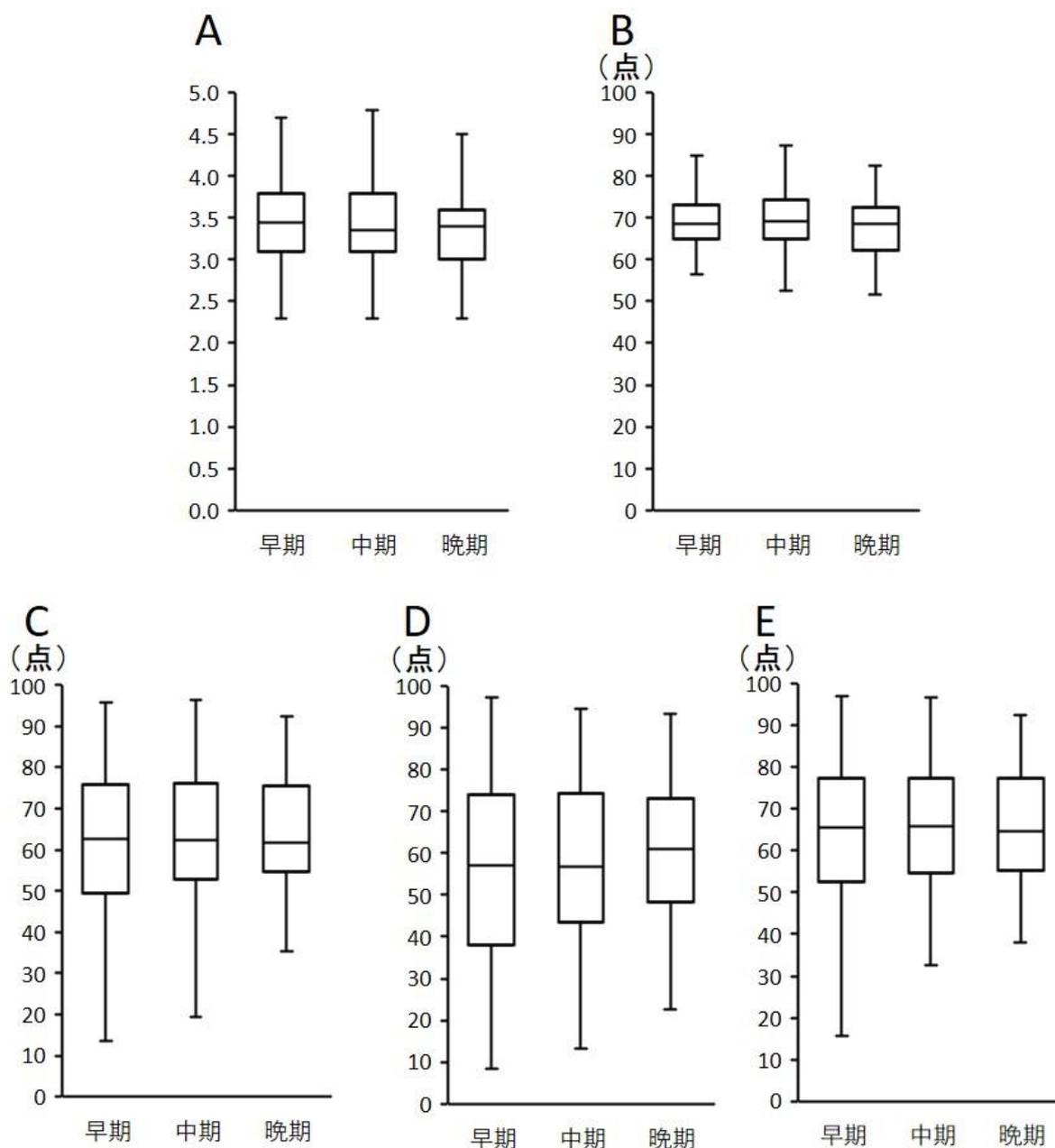


図6. 入試受験時期別分析

Aは評定平均値，Bは入学試験成績，Cは中間全科目，Dは中間基礎分野，Eは中間専門基礎・専門分野の結果を表す。箱ひげ図の中央線が中央値を，箱の大きさが四分位範囲を表す。早期群(n=194)，中期群(n=125)，晚期群(n=58)。評定平均値の分析のみ早期群(n=184)，中期群(n=122)，晚期群(n=53)。

4. 考察

4-1. 相関分析

中間基礎分野と中間専門基礎・専門分野の間には，評定平均値や入学試験成績以上に強い正の相関がみられた。基礎分野はいわゆる一般教養科目に位置付けられている分野であり，基礎学力に影響される部分が多い。つまり，一般教養科目の点数が高い者は専門的な医療分野の学習においても高得点を取得することが考えられる。岡本ほか(1998)の報告でも同様に一般科目の平

均点と専門科目の平均点は正の相関を示しており、本研究結果と同様の傾向を示している。すなわち、入学試験において一般教養科目に該当する内容の学力を正確に測定できれば、入学後の試験で高得点を取得できる確率の高い者を選抜できると考えられる。

入学試験成績と入学後の成績は相関がない、または弱い正の相関があるという報告が多い（柳澤ほか、2000；香川ほか、1982；平澤ほか、2008）。しかし一方で、高い正の相関があるという報告もある（岡本ほか、1998）。本研究では正の相関が認められたため、A 専門学校では有用である可能性はあるものの、一貫した報告がないため入学試験成績から入学後の成績を推測できるか否かは議論の余地がある。

4-2. 評定平均値別分析

今回の分析結果では、評定平均値が高い方が入学試験成績や中間試験の点数も高かった。現在高校の評定は絶対評価が採用されているが、各高校が実施する学習内容、範囲、科目や定期試験の難易度の設定は異なるため、客観的な数値としてとらえられない側面があると考えられる。しかしながら、岡本ほか（1998）の報告では、留年者は予定卒業者と比較して高校評定が低いこと、赤木ほか（2010）の報告でも高校評定平均値と1年次の学業成績には弱い相関があると述べられている。本分析結果も同様の傾向を示していることから、評定平均値は入学後の学業成績を推測するうえで有用な指標の一つであると言える。

4-3. 学歴別分析

文部科学省（2022）が公表している学校基本調査によると、大学卒業後の就職率は74.5%である。残り25.5%のうち、就職を選ばず、新たに資格取得のために勉強することを決意して専門学校に入学する大卒群は、高卒群よりも学習意欲が高いと考えられる。また、大学での学習を通して基礎学力の向上や自身の学習方法が確立されているため、大卒群の方が高卒群と比較して中間試験の点数が高かったと考える。大卒の入学者を増加させることは、入学後の学業成績平均を向上させるうえで重要な方法の一つであると考えた。

4-4. 男女別分析

文部科学省（2022）が公表している学校基本調査によると、大学進学者のうち、女性の割合は45.6%、専門学校への進学者のうち、女性は57.6%となっており、専門学校では女性の占める割合が大きい。また高松（2022）は医療系専門職への女性の進学希望が男性より多いと報告している。A 専門学校の女性入学者は33.3%で、専門学校進学者の全国平均より低い。公益社団法人全国柔道整復学校協会（2022）が行ったアンケート調査から柔道整復師養成校の入学者の男女比率を算出すると、男性63.5%、女性24.2%、未回答12.3%であり、柔道整復師養成校に限るとA 専門学校への女性進学率は平均より高いことが分かった。

本研究結果では、評定平均値、入学試験成績、中間全科目、中間基礎分野および中間専門基礎・専門分野全ての分析で男性群より女性群の方が有意に高値を示した。評定平均値別分析結果では評定平均値が高い群の方が低い群に比べ、入学試験成績および中間試験の得点が有意に高値を示した。つまり評定平均値が高値を示した女性群の方が、入学試験成績および中間試験結果が良いという結果と一致している。大学生を対象とした山本・島本（2015）の報告も本結果と同様に男性より女性の学業成績が高いことが示されている。さらにこの先行研究では、対人スキルと対人

マナーが高い学生の方が学業成績も高く、男性よりも女性の方が対人スキルと対人マナーは高いことが示されている。以上のことから、女性の方が教員やクラスメイトとの良好なコミュニケーションを図ることに長け、積極的な学生同士の学び合いや、教員への質問に主体的に関わるなど、学習の補完を行う頻度が高いのではないかと推察した。

4-5. 入学試験区分別分析

A 専門学校での推薦入試では評定平均値が 3.0 以上であることが出願条件として定められている。そのため、推薦入試の入学者は AO や一般と比べて評定平均値が有意に高値を示したと考えられる。さらに、推薦群は入学試験成績も AO 群や一般群より有意に高かった。ただし、A 専門学校での推薦入試は個人面接のみで実施されているため、小論文や学科試験と合わせて評価をしている AO 入試、一般入試との正確な成績比較には今後検討の余地がある。また、個人面接においては点数化によって客観的に評価をしているが、個人面接のみの推薦入試では出願者は面接にしばって受験対策を講じているため、入学試験の成績が有意に高かったのではないかと推察した。

入学試験区分別に学業成績を比較した先行研究では、主に推薦群と一般群で比較した報告が多い。推薦群よりも一般群の方が良い学業成績を取得しているとの報告もあれば(岡本ほか, 2003)、一般群よりも推薦群の方がやや良好な成績を示したとの報告もあり(難波ほか, 2005)、一定していない。さらに、本研究結果と同様に群間に有意な差は認められなかったとの報告もある(池田, 2009; 赤木・日比野, 2013)。学部や学科、取得する医療資格種類により異なるかもしれないが、入学試験区分による学業成績についての結論は明確ではない。さらに、赤木・日比野(2013)は、推薦入試群と学力型入試群の2群に分けて比較した結果、国家試験の可否には有意な差はないものの、国家試験の取得点数には有意な差があると述べている。学力型入試群は、受験勉強による学習の習慣化や学習時間が長いことなどの影響を受けているのではないかと考察している。今後2年次や3年次の成績、さらには国家試験の可否や点数との関係を分析していくことで、入試区分が国家試験の可否に影響するか否かが明確になる。

4-6. 入学試験受験時期別分析

A 専門学校の入学試験形態は年度により多少日程は異なるものの、主に早期は AO 入試、中期では AO 入試に加えて推薦入試、晩期は AO 入試に加えて一般入試が実施されている。早期受験者は早い時期から進路先を考え受験に臨んでいるため、それだけ進学意欲が高く、成績も有意に高いのではないかと考えられる。一方、早期に進路が決定すると受験勉強を行わないので基礎学力の伸びは鈍化するとも考えられる。中期の受験者は推薦入試が多いが、推薦入試は評定平均値 3.0 以上を出願要件とするため、高校での学力が一定基準を超えた成績を修めていると考える。また、晩期群は受験勉強を行ってきたが、希望する大学に進学できず、専門学校に進路変更し、受験する者がいる。このような入学者は基礎学力が高い傾向にある。一方で学習をあまりせずに卒業期まで進路が決まらずにいた学生も一定数おり、このような学生の基礎学力は低い傾向にある。これら多数の要因が重なり合った結果、入学試験受験時期を分析した全ての項目において、有意な差は認められなかった。結果として、入学試験受験時期から入学後の成績を推測することは極めて困難であると結論付ける。

5. まとめ

1. 2014年から2023年の10年間におけるA専門学校の柔道整復師養成課程への入学者を対象として、高校の評定平均値、入学試験の成績、および毎年6月上旬に実施される中間試験（中間試験全科目、中間試験基礎分野、中間試験専門基礎・専門分野）の平均点を調査し分析した。
2. 相関分析では、評定平均値と入学試験成績、中間試験間で正の相関がみられ、特に中間試験基礎分野と中間試験専門基礎・専門分野間で強い相関が認められたことから、一般教養科目の学力が高い者は専門的な医療分野の学習においても高得点を取得することが明らかとなった。
3. 評定平均値が高い群ほど入学試験成績、中間試験の結果は良いことが明らかとなったことから、入学試験選抜時の評定平均値は入学後の学力を推測するうえで有用である。
4. 高卒群に比べ、大卒群の方が中間試験の点数は高値を示したことから、大卒者を対象とする入学試験の広報に力を入れて展開することは、入学後の学内成績を向上させる上で重要な戦略の一つであると考えられる。
5. 男性と女性の入学者割合は約2:1であり、男性より女性の方が評定平均値、入学試験成績や中間試験結果は高いことが明らかとなった。
6. AO入試、一般入試、推薦入試のどの群でも入学後の中間試験結果に有意な差がないことが明らかとなった。
7. 評定平均値や入学試験成績、中間試験結果は、入学試験受験時期による差はないことが明らかとなった。

参考文献

- 赤木充宏・日比野至（2013）理学療法士国家試験に至るまでの学業成績に関する調査:入試区分の違いによる検討. 名古屋学院大論集 人文自然科, 49: 7-15.
- 赤木充宏・肥田朋子・日比野至・平野孝行（2010）名古屋学院大学人間健康学部リハビリテーション学科学生に関する学業成績の調査. 名古屋学院大学研究年報, 23: 51-59.
- 浜田知久馬（2014）東京理科大学総合教育機構教育開発センター活動報告書. pp.58-66.
- 服部辰広・久保山和彦・樋口毅史・松田康宏・箭柏えり・伊藤譲（2018）1年および2年次の成績と4年次成績との関係性について—整復医療学科2014年度入学生（1期生）を対象とした調査より—. 日体大紀, 48: 61-64.
- 平澤明美・小黒章・渡邊美幸（2008）明倫短期大学における2年制歯科衛生士教育課程と歯科衛生士試験—歯科衛生士試験成績と入学時基礎学力調査—. 明倫歯保健技工誌, 11: 14-19.
- 池田文人（2009）入試区分による入学後の学業成績の優劣の検証. 大学入試研究ジャーナル, 19: 95-99.
- 香川靖雄・青野修・横山英明・中野康平・高久史磨（1982）自治医科大学における入学試験より医師国家試験に至る学業成績の追跡調査. 医教育, 13: 55-63.
- 公益社団法人全国柔道整復学校協会（2022）入学者の構成に関するアンケート調査報告
<https://www.judo-seifuku.or.jp/wp/wp-content/uploads/2022/10/12d32dc4d2629ad543c94d6dcb99f22b-1.pdf>
- 松本揚・岡田隆・岡村知明・橋本俊彦・大澤裕行（2015）柔道整復師国家試験必修問題に出題され

- た柔道整復理論の出題傾向. 了徳寺大研紀, 9: 97-101.
- 文部科学省総合教育政策局調査企画課 (2022) 令和4年度学校基本調査(確定値)について.
https://www.mext.go.jp/content/20221221-mxt_chousa01-000024177_001.pdf
- 本岡直子・岩谷和夫・佐藤学・城本修・堂本時夫(2003) 広島県立保健福祉短期大学における入試方法・成績, 学内成績, 国家試験合否の関係. 人間と科: 広島保健福祉大, 31: 95-104.
- 難波哲子・岡真由美・田淵昭雄(2005) 川崎医療福祉大学感覚矯正学科視能矯正専攻学生における入学者選方法と入学後の経過—1995年～2004年卒業生について—. 川崎医療福祉会誌, 15: 183-190.
- 岡本基・崎山順子・赤塚和(1998) 衛生技術学科入学者の高校評点, 入学試験成績と入学後の学業成績の関係—入学者選抜, 教育方法の改善に向けた自己点検・評価(1)—. 岡山大医療技短大紀, 9: 91-104.
- 高松里江(2022) 進路選択におけるジェンダー・トラック: 男女間・同性内の進路希望の違いに着目して. 理論と方法, 37: 170-183.
- 坪田裕司・岸本眞・酒井桂太・富樫誠二(2011) 本学理学療法専攻1期生の生理学と卒業時の成績の相関と予測される下級生の学力推移. 大阪河崎リハ大紀 5: 63-69.
- 山本浩二・島本好平(2015) 体育系大学生におけるライフスキルと学業成績との関連. 神戸医療福大紀, 16: 93-103.
- 柳澤健・新田収・笠井久隆・猫田泰敏・飯田恭子・菊池恵美子・長田久雄・福土政広・齋藤秀敏・福田賢一(2000) 東京都立医療技術短期大学生の入学・在学時成績と医療系国家試験合否との関係. 東京保健科学会誌, 2: 276-281.

共同研究者

(代表) 吉田 裕輝
園部 英貴